真夜中すぎの夜明け

Septemer

Booko
出版

目次

抜け殻
出会い
告白
東京
映画館
秘密
木漏れ日
虚無
カプチーノ
煙草
沈丁花

神戸
夢
天国在住
藪下櫂　インタビュー
あとがき

真夜中すぎの夜明け

映画に救われ
ドラマに救われ
音楽に救われ
小説に救われ
猫に救われ
あなたに救われ

私の人生は、そんな人生のように思う。

抜け殻

毛布の中から抜け出し、色褪せたカーテンを思い切り開けると、少し埃っぽい匂いがした。窓の向こう側に広がるグレー色の街からは、人の気配すら感じない。

記憶を掘り返して、両手は追憶だらけ。追憶を顔に塗りたくって、泣きじゃくって。それでもまだ、足りず。信じられなかった。

君が居なくなったこの部屋で、僕は君がしていたことをしてみようと思った。大きな本棚にびっしりと埋まり、積み上がっている本をひとつずつ手に取りながら、君はどんなことを感じていたのかと、耳を当てるように手を当ててみる。少し溜まった埃はきっと、近いうちに見なくなるだろう。本棚や床に沢山ある本の中で、一番手の届きやすい場所にあったのは、恐らくこの家の本の中で一番古いと思われる一冊の文庫本だった。厚みはそれ程分厚くはなく、カバーの端が少し破れており、色はかなり日焼けをしていた。パラパラとめくり始めると、数ページ程で栞が挟まっていて、めくれる紙の動きが止まった。きっと何度も読んだこの本を、また読み始めていたのだな

というのが伝わって来た。そのままそっと閉じて、元の場所へ戻した。
ベッドの傍にある白いシャツを羽織り一番上までボタンを留めた。ブラックのスーツジャケットを取り、脱走防止柵の扉を閉め、家を出た。
グレー色の街はもう見当たらない。

一匹だけ鳴いている蝉。もうお前の世界にはきっと誰も居ないのに、その健気な姿が、何だか君の世界のように感じた。

「抜け切れなかった蝉みたいだから、少し摘まみ出して欲しい」と、夜の散歩を提案され、二人でアイスを買いにコンビにまで出掛けることにした。
付き合って一年目の夏のことだ。
「影がわからないね」と、呟きながら、ふたステップ程スキップをして上機嫌な君は、夜風に吹かれながら、柔らかい羽根を乾かす蝉のようだった。

色付き始めた街を眺め、ふと、君の言葉を思い出した。

マンション下の花壇に落ちている三匹かたまった蝉の抜け殻に向かって、「お前たち、本当に抜け殻から出たのか？　会ってない気がするのは、気のせいだよな？　今年も変わらず、そこに居たんだよな。お前たちの声が聞こえなかった夏は、ちょっと切ないよ。なあ？　そう思うだろ？」と語りかけてみた。蝉の抜け殻は無言なまま、これでもかというくらいに、静かに時間は流れて行く。

電車が走る高架を振り返ると、驚く程に、地下鉄のホームを吹き抜ける風と同じで、翻訳出来ない感情の破片が、僕の涙を溢れさせる。

汗ばんだあの夏が過ぎても、ずっと熱帯夜が続いているような、そんな感覚だった。四十九日を迎えるまでのそれとは違う感覚に僕は、確実に日々は変化し続けているのだということを知る。痛くて、切ない夏は、僕が生きていることを証明した。

記憶の中にある、夕焼けに染められた入道雲が、今日にさよならする時、僕はようやく自分を取り戻す。

僕の記憶の中で、振り返った君の頬を、艶やかな長い黒髪が優しく撫でる。君と一

緒に過ごした年月は、片手でこと足りてしまう事実を、未だに受け止められない。
時間のズレはまだ元に戻ることはなかった。
青い空の下には鱗雲が一面に敷かれていた。

雲は秋の始まり

気が付けば、九月半ばを迎えていた。